

エペソ人への手紙4章1-16節「御体の一致」

1A 保持による一致 1-6

1B 召しによって 1-3

2B 一つなる御霊によって 4-6

2A 賜物による一致 7-11

1B 勝利者イエスの分け前 7-10

2B 立てられた指導者 11

3A 成長による一致 12-16

1B キリストの似姿 12-13

2B 安定性 14-16

本文

エペソ人への手紙を開いてください、私たちは今朝、4章の前半を読んできたいと思います。私たちがバプテスマ式を終えた今、教会としてこの箇所を見ていくのはふさわしいところだと思います。一言一言がとても豊かであり、本来なら数節のみ取り扱うのがふさわしいですが、けれどもキリストの御体の全体像を知るために、1節から16節までを読んできたいと思います。

この箇所で私が目に留まった、鍵となる言葉は「一致」です。「平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。(3節)」、13節、「ついに、私たちはみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し」とあります。キリストが私たちに願われていることは、ご自分にあって一つになることです。主がユダヤ人に捕えられる直前、父なる神に祈られましたが、それは父が子と一つであられるように、私たちが一つになることであります(ヨハネ 17:21-23)。神が私たちを見る時に、それは個々のキリスト者である私たちも見ますが、一つになっている私たちを見えています。私たちはキリスト者としての歩みを自分だけを見つめて判断すれば、不十分であります。共同体としての私たち、体として、家族としての私たちが神は見ておられます。

1A 保持による一致 1-6

1B 召しによって 1-3

1 さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。

パウロは今、ローマ皇帝の法廷で裁かれるために牢獄の身です。しかし、パウロはこれを主イエス・キリストによって縛られているとしています。そして彼は、「召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」と言っています。召されたというのは、神に呼び出されたということです。大いなる祝福を受ける者とされた、ということです。

エペソ 1 章から 3 章までにおいて、神がキリストにおける、天にあるすべての霊的祝福をもって祝福されたことを、パウロは述べています。キリストにあって選ばれたこと、その流された血によって罪が赦されたこと、そしてすべてのものの神であられる方がご自分の国を建てられますが、キリストにあって私たちがそれを相続すること。そして聖霊が与えられ、聖霊が、私たちが神の国を受け継ぐ保証となってくださっていることが 1 章に書いてありました。

2 章には、罪の中で死んでいて、神の怒りを受けるしかない私たちが、キリストと共によみがえって、キリストにあって天の所に座らせていただいている、とあります！これが、私たちがバプテスマによって示されたことでした。罪の中で死んでいた私たちです。しかしキリストが共に死んでくださり、葬られて、そしてよみがえってくださったのです。私たちの罪も葬られ、そして新しい命にあって歩むことが許されました！それから、キリストにあって私たちは一つにされたこと、平和が与えられたことも見ました。二つに分裂しているものが一つになり、具体的にはユダヤ人と異邦人が一つになり、一つの体として神に仕えることができるようになったということです。

この大いなる恵みがあり、キリストの愛の高さ、深さ、長さ、広さがあり、私たちが神の前に立っています。それが 3 章の内容です。そして、ここで話している「召し」があります。すなわち、神の下さった恵みに応答することです。それは、私たち自身がその恵み深さと愛を他者に対して分かち合うことによって初めて可能であります。自分が神の恵みと愛を受けて、それで他者は受け入れず、無慈悲であるならば、その人の内には神の愛は留まっています。神から受けた恵みは、それを隣人に分かち合うことによって初めて私たちの内に流れます。

2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

ここで大切なのは、私たちは御霊によって既に一つにされているということです。「御霊の一致を熱心に保ちなさい」とあります。これから一致団結して進んでいこう、というのではなく、もう神の恵みによって一致団結されているのです。けれども問題は、私たちがその一致を取り壊すこともできるということです。私たちが自分自身を求めることによって、神の愛ではなく自分を愛することによって、壊すことができます。ですから、絶え間なく御霊の一致を保ちなさいということです。

どのようにしてか？聖書は徹頭徹尾、「水平の関係は、垂直の関係によって是正される」ことを教えています。互いの関係も、神との関係によって正されます。2 節は、「謙遜と柔和の限りを尽くしなさい」とあります。初めに謙遜であります。謙遜とは、「神の前で自分がとてつもない罪人である、神が正しく私は悪い。しかし、私の行いではなくただ神が義と認めてくださることによって、私は今の私なのだ。」という感動であります。この感動があれば、他者を自分よりも優れたものとみなすことができます。相手を見下げることはできません。

そして「柔和」とは、簡単に言うと「仕返しをしない」ということです。人と生きていく上で、自分にとって都合の悪いことを言われたりされたりしても、主の裁きに任せて、自分で仕返しをしないということです。ダビデがサウルに対してそうでした。自分を殺そうとしていたのに、彼が自分の隠れていた洞窟にやってくるまで、彼を剣で殺しませんでした。自分がそんなことはできない、殺すのであれば主が殺されるのだという、繊細で柔らかい心を持っていました。ですから、自分ではなく、主の中に生きることによって可能です。

そして「寛容」であり、「愛をもって忍び合う」のです。寛容は、悪を許容し、是認することでは決してありません。そうではなく、不都合なこと、不快なこと、怒らせるようなことをされても、自制をもって耐え忍ぶということです。私たちの内にキリストの御霊がおられれば、キリストを思って私たちは堪えることができます。それだけでなく、さらに愛をもって忍び合います。これは重荷を負うということでもあります。「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。(ガラテヤ 6:2)」皆さんは、自分ではなく他者に対する重荷はありますか？その人のために執り成し、いつも気にかけて、働きかける人です。

私たちが霊的に成長する時に、三つの段階があると言われる。一つは「自分」です。自分のことがいつも気になります。自分がどうなのか？を考えています。その行ないが気になり、はたしてそれが正しいのかどうか、いろいろ悩みます。けれども、二つ目、そこから「神」に関心が変わります。神がどのような方なのか、神が何を行ない、言われているのか？聖書をたくさん読み、キリストについての本をたくさん読むことでしょ。そこから三つ目に入ります。それは「他者」です。キリストが自分を通して他者にどのように働かれるのかを、絶えず意識しています。この段階にまで神の恵みが働きます。自分のいただいた神の恵みが、他者へ働きかける恵みへと流れていきます。

そして、私たちが忍耐を働かせた結果、「平和のきずな」によって結ばれます。大事なものは「絆」であるということです。私たちがキリストにあって互いにつながっているところにある、平和です。キリストにあって自分のものを分かち合っていることによる平和です。自分を周りで固めて、自分と他者を区別していき、互いに干渉しないというような平穏は、神の平和ではありません。それは「分離」と呼ばれます、平和ではないのです。そして、この平和がある時に私たちは一つになることができます。

ですから御霊の一致は、神学や聖書解釈の細かいところの一致や自分の意見と合っている人たちとの一致ではなく、キリストにあって他者を積極的に受け入れていくところにある一致です。

2B 一つなる御霊によって 4-6

4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。4 すべてのものの上にあり、

すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。

「一つ」という言葉が並んでいますね。これは一致の土台と呼んでもよいでしょう。これらは目に見えないけれども、霊的に現実存在する一致です。一つ目は、「からだは一つ」であります。御霊によって私たちは一つのキリストの体に入れられました。だれでもイエスを神の子キリストと信じた者は同じ体の中にいます。したがって、それは私たちの教会を超えます。カルバリーチャペルという群れも超えます。そして国や民族を超えます。そして時代も超えるのです。私たちは自分たちだけ、自分の仲間だけ、今だけの体を見るだけでなく、このように非常に広く、長いキリストの御体を見るべきであります。

そして「御霊は一つ」です。私たちは同じ神の御霊を受けているのです。したがって、神の御霊の中で私たちは一つにされています。これは不思議なことです。「人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。(1ヨハネ 4:2)」私たちは強制されてではなく、ただイエスが確かに神の御子であり、キリストであることを自発的に信じていることができます。

それから、「召しのもたらした望みが一つ」というのは、主イエス・キリストが戻ってきてくださる望みのことです。私たちは、キリストにあって新しく造られた者です。霊が新しく生まれました。しかし、この体をも新しくしてくださる時があります。イエス・キリストが戻ってこられる時です(ピリピ 3:20-21)。イエス様が戻ってこられて、私たち教会は天に引き上げられます。その時に、全教会が一堂に会するのです。どの時代の人も、どこにいる人も、自分が嫌いだった人も、キリストの内にいた者はみなそこにいるのです！どうですか、「もうこの人とは会えなくなってせいせいした。」と思っている人は、天において会わなければいけないのですよ！今のうちに和解しましょう。

そして五節です、「主は一つ」ですね。もちろんイエス様がたくさんいるのではありません。大事なのは、一人一人がイエスを主としているか？であります。私たちが自分の主義・主張を捨て、イエスを強烈に自分の主、自分の全てとする時に、この方において一つになれるのです。十二弟子の中には、ユダヤ教の熱心党员シモンがいました。ローマを武力で打倒しようとした人です。そして取税人マタイがいました。彼はローマの犬です。イエスを主としていなければ、その場で熱心党员シモンは取税人マタイを殺したことでしよう！

そして「信仰は一つ」です。この信仰とは、英語では the が前に付くような信仰、つまり、イエス・キリストの関する真理についての信仰です。イエスが神の御子であること。イエスがキリストであること。この告白を固持している信仰であるかどうかであります。それ以外の違いは、私たちが互いに「お前はクリスチャンではない」と言わせるようなものでは決してないのです。そして、「バプテスマは一つ」であります。教会では、自分たちのバプテスマの方法で受けなければ、バプテスマであると認めないとします。例えばカトリックでは、皆さんが受けたバプテスマは受け入れられません。

それはカトリックではないから、と言います。しかし、バプテスマはイエス・キリストにつくバプテスマだけなのです。

そして、「すべてのものの上におられ、すべてのものを貫き、すべてのもののおられる、すべてのものの父なる神は一つです。」とあります。父なる神は超越された方です。そして、全てに関与されている方です。そして、どんな小さな事がらにもそこにおられる方であります。こうして見ますと、御霊、主キリスト、父なる神という三位一体の神をここで見ます。

2A 賜物による一致 7-11

1B 勝利者イエスの分け前 7-10

4:7 しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。4:8 そこで、こう言われています。「高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた。」4:9 ..この「上られた。」ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということではなくて何でしょう。4:10 この下られた方自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです。..

6 節まで私たちは一つになっている、というところを見ました。7 節は、「しかし」から始まっています。一つとされているキリスト者は、画一化されているのでは決してありません。「多様性のある一致」なのです。神の恵みが与えられ、それぞれにキリストは賜物を与えられました。それぞれの賜物は異なり、その働きも異なります。しかし、それは分裂しているのではなく、むしろ体の器官がそれぞれ違うけれども一つの体を成しているように、調和しながら動いているのです。

一つにされているけれども、異なる働きがあるということを理解するのはとても大切です。私たちは二月に、韓国の済州という島で日中韓三国の青年キリスト者が会して、主を礼拝し、賛美しました。そこで私たちが確認したのは、日本人である前にクリスチャンである。韓国人である前にクリスチャンである。中国人である前にクリスチャンであるということです。したがって、世の中における三国間にある対立とは裏腹に、私たちの間には美しい一致がありました。けれども同時に、私たちはそれぞれの国に遣わされています。なぜ日本に生まれたのか、それには神の目的があります。日本の民族性が、神の聖霊によって清められ、神の栄光を現すことができます。一つでありながら、それぞれ異なる使命と働きがあるのです。

同じように、皆さん一人一人に聖霊の賜物が与えられています。それは、自分がその能力を弄ぶものではありません。自分の能力でもありません。キリストの体の中で、人々を愛し、仕え、骨折る時に神から与えられる力であります。もし全体の益になる奉仕を望んでいなければ、聖霊の賜物を生かすことは期待しないでください。

具体的な賜物が列挙されている箇所が新約聖書に三つあります。一つはローマ 12 章です。そ

ここには、教会で奉仕として用いる賜物です。教えること、勧めること、分け与えること、指導すること、慈善を行なうことなのです。そしてもう一つはコリント第一 12 章です。そこには御霊の賜物として、超自然的な側面を持つ賜物が列挙されています。知恵と知識の言葉、預言の言葉、信仰、癒し、奇跡、異言、その解き明かし等であります。そして三つ目は、ここエペソ 4 章です。

2B 立てられた指導者 11

11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。

これらの賜物は、指導者の賜物です。キリストの体が建て上げられ、一つにされる時にキリストは指導者を立てることによって一つにされます。使徒は、厳密な意味では今の教会には存在しません。使徒は新約聖書を書き、彼らの教えが神の真理を伝える土台になっています。けれども、使徒の元々の意味は「遣わされた者」ということですから、全く新しい地域で文化や言語を越えて働く宣教師は、使徒のような賜物を持っています。預言者は、教会における限定的な神の言葉、教えのような普遍的なものではなく、その場における神の励ましや、慰め、徳を高める言葉であります。そして、伝道者は教会を巡回して、イエス・キリストの福音を伝えます。

そして、最も身近な働き手、聖徒たちにとってはいつも一緒にいて、霊的に育てている人は、ここに書いてあるように牧師また教師であります。ここは、教師と牧師は切り離せません。牧師であれば、だれもよく教える人でなければいけません。牧師は羊飼いのことです。その働きは二つあります。養うことと、守ることです。神の御言葉をしっかりと教えることによって、霊的に養います。そして、誤った教えや悪魔の唆しなど、狼がやって来るような時、守るように動くのも牧者の働きです。

ですから、牧者がキリストから与えられている賜物をよく用いることによって教会は安定して、一致します。ある人々は、「全ての人々が聖なる者とされたのだから、誰かが人の上に立つのはおかしい。」と話します。これを言った人、誰か覚えていますか？コラです。モーセとアロンが上に立つのがおかしいと言いました。しかし実は、自分自身がイスラエルの上に立ちたかったのです。そのようなことを言ったのです。教会に指導者が立てられることと、一人一人に賜物が与えられ、神に仕える祭司になっているということは、矛盾することではありません。

3A 成長による一致 12-16

教会の平和、その秩序と一致のためには指導者としての賜物が用いられる必要があります。そこで次、その働きによって御体が成長して一致をもたらす、成長による一致があることを教えます。

1B キリストの似姿 12-13

12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなにな

って、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

ここは、キリスト者がしばしば誤る考えが示されています。奉仕の働きをするのは、聖徒たち一人一人です。多くの場合、二つの極端があります。一つは、牧師が奉仕の働きをして、私はその奉仕を受けていればよいというもの。もう一つは、牧師だけが奉仕をしており、私は牧師の働きの一部になっている、つまり牧師の言われていることだけをする、というものです。しかし、聖徒がキリストにあって他者に奉仕をするという積極性に欠けています。牧師も奉仕するのですが、むしろ聖徒たちが奉仕をすることができるよう整えるのがその主な働きなのです。

そして、その奉仕の働きによってキリストの体が建て上げられます。体と表現していますが、後で建物が組み合わされていく形容があります。建て上げられていくことが、教会の目的であります。そして、その結果として、再び体に戻っていますが、ちょうど子供が大人の身丈になるように、私たちがキリストの身丈にまで成長するのだ、と言っているのです。

ここで大事なのは、このような奉仕の働きをして、建て上げられ、それで信仰と神の御子の知識に一致がもたらされるということです。私たちは、体験的に、具体的な教会生活の中で初めて、机の上でキリストについて知識を学んだのではなく、体験的に、具体的にキリストに共に預かることができるのです。「私は独りでキリストに出会える。」、そうかもしれません、けれども、とても大きな部分、体の中でキリストを知るという醍醐味を見失ってしまうのです。

2B 安定性 14-16

そして教会は建て上げられ、成長するだけでなく、今度は安定して、揺るがぬものとなります。

14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたあそばされたりすることがなく、15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。16 キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。

キリスト教会と言えども、いろいろな教えの風が吹いています。霊的に幼いと見分けがつかず、それに振り回されてしまいます。そして、このことが個々人ではなく、複数名、あるいは教会の一部で起こってくると、分裂が起こるのです。これが、悪魔が行いたいと願っていることです。しかし、キリストにあって自分が建て上げられることによって、見分けがつくようになります。成熟とは何か？その特徴は安定であります。情緒が安定しているのが、大人の特徴の一つですね。同じように霊的に安定するのです。

そして大事な言葉があります。「愛をもって真理を語り」です。再び愛であります。しかし愛は、真理を語ることによって示されます。真理のない愛は、嘘つきです。罪を罪と示さなければ、それは嘘つきの愛です。本当に愛は、罪を犯せば死ぬと教えることです。しかし愛のない真理は、残酷でしかありません。愛によって私たちは建て上げられ、その愛は真理を語ることによって伝えられるのです。

そして、私たちキリストの体が、神の建物に例えられています。それぞれの部分がよく組み合わされて、結び合わされ、それで全体として成長し、大事なのは再び「愛のうちに建て上げられる」とあります。私たちは、「ここには愛がある」という褒め言葉を受けているでしょうか？愛があるからこそ、私たちは教会として建て上げられます。そして、一つの体、一つの建物として一致しているのです。